

O-0046

臨床実習における学生の心理状況に関する研究 指導者との性差関係に着目して

藤平 保茂, 古井 透, 岡 健司, 小森 武陸, 酒井 桂太

大阪河崎リハビリテーション大学

key words 臨床実習・学生の心理状況・性差

【はじめに, 目的】

大学生を対象とした豊田(2012)の研究では、「自分に対して要求される援助的指導や友好的指導に対し、相手の性に対する好意帰属には性差がある」としている。ところで、臨床実習(以下、実習)における学生への効果的な教育には、Active learning(能動的学習)習慣を引き出すことが推奨されている。しかし、実際の実習場面では、常に臨床実習指導者(以下、SV)から援助的指導や友好的指導を受ける場面ばかりではない。むしろ叱責されることも少なくないだろう。指導の受け止め次第では不安感が学生の自主的な取り組みを阻害し、実習をさらに辛いものにすることもあるだろう。われわれ教員の願いは、学生が「実習は辛いかもしれないが実りのある楽しいもの」と感じてくれていることだが、SVとの性差が学生の心理状況に影響があるとすれば、実習指導時に配慮する必要があるだろう。

そこで、本研究では、学生とSVとの性差関係における同性、異性の観点から、実習に対する学生の心理状況を調査・分析し、その特徴を比較することを目的とする。

【方法】

対象は、平成24~26年度に8週間実習を終えた大阪河崎リハビリテーション大学(以下、本学)理学療法専攻の204名の学生(男子144名、女子60名)であった。

調査には、筆者らの臨床教育経験から予想される項目を選び本研究用に作成した調査票を用いた。属性は、学生自身の性、SVの性を問うた。質問は7項目(不安感、緊張感、辛さ、楽しさ、やり甲斐、SVへの苦手意識、我慢(とにかく我慢しなければと言いきかせた))で、「非常によくあてはまる:7」から「全くあてはまらない:1」までの7件法で評定させた。調査は、実習終了後の第一登校日に実施した。

分析は、学生の性(男、女)とSVの性(男、女)の組合せにて4群に分類し、Spearmanの順位相関検定にて、質問項目間の相関関係をみた。なお、有意水準を5%未満とした。

【結果】

4群間の比較では、同性同士の2群に共通する相関関係では、不安感と楽しさ・やり甲斐間、辛さと楽しさ・やり甲斐間、楽しさと我慢間の関係にそれぞれ有意な負の相関($r=-0.30\sim-0.40$)が認められた。しかし、これらの関係は異性間の2群では一切認められなかった。一方、同性間で有意な相関関係が認められたにも関わらず、女子学生と男性SV群では、不安感・辛さと苦手意識の関係、やり甲斐・苦手意識と我慢間での関係が認められず、男子学生と女性SV群において、やり甲斐と苦手意識間での有意な関係が認められなかった。

【考察】

学生の心理状況には、学生の性とSVの性の組合せによって相違が生じることが示唆された。つまり、男性同士、女性同士の組合せでは、不安感・辛さが強いと楽しさ・やり甲斐が低く、楽しさが高いと我慢する気持ちが低くなった。一方、男性SVと女子学生の組合せでは、不安感が強いと苦手意識が強いこと、辛さが強いと苦手意識が強いこと、やり甲斐が高いととにかく我慢する気持ちが低いこと、苦手意識が強いと我慢する気持ちが強いことが、それぞれ認められなかった。また、女性SVと男子学生の組合せでは、やり甲斐が高いと苦手意識が低いことはなかった。

豊田(2012)は、「男子では、自分が援助的行動を要求された場合、同性よりも異性に対してより快な感情が生じ、女子では、自分に対して友好的行動を要求してきた場合、異性よりも同性に対してより快な感情が喚起される」と報告した。すなわち、例えば、担当学生が失敗を繰り返したならば、性を問わずSVはその学生への感情評定を下げるが、男性SVの場合は男子学生より女子学生に対しより援助的となり、女性SVの場合は男子学生より女子学生に対し非好意な感情を強めたと考えられる。そして、このようなSVから感じ取る学生の思いが、異性よりも同性のSVにより強く持たれ、不安感や辛さをより強め、楽しくない実習、とにかく我慢しなければいけない実習と感じたのではないだろうか。しかし、男性SVに対し女子学生が苦手意識を高めながらも我慢しなくてはならないと感じなかったのは、男性SVが女子学生を快く指導できることが彼女らの自尊感情を高めることに繋がったからではないかと考えられる。一方、女性SVに対し男子学生がやり甲斐が高まるにも関わらず苦手意識が下がらなかったのは、男子学生の女性SVに対する非友好的感情がSVの快な感情を下げることに繋がったからかも知れない。

【理学療法学研究としての意義】

学生とSVとの性差に視点をおいた今回の研究は、学生の能動的な学習習慣を引き出す手がかりになり得る研究と考える。